令和4年9月26日（月）

他職種カンファレンス発表会

～事例検討
利用者理解の大切さ～

介護老人保健施設　セージュ山の手
3階　森田裕子、石栗優子

＜　事例紹介　＞

S氏　女性　７８歳

アルツハイマー型認知症　要介護５

他施設入所中、昼夜関係なく徘徊や他者トラブル、他室訪問もあり太田病院へ入院。

病院ではコロナにも罹患し、一時は酸素使用などもあり、

ADL低下の為、リハビリ目的にて令和４年４月７日～８月末セージュ山の手3階へ入所となる。

＜　セージュ入所後の様子　＞

リハビリがすすみ、立ち上がる事も増え徐々にADLが向上、
手引き誘導にて歩行が可能な程、下肢筋力のアップ、日中の活動量増加

1、会話でのコミュニケションがとれず、多動だが
本人が何をしたいのかがわからない

2、徘徊が多く、転倒リスクも高く常時見守りが必要

3、急な感情変化で怒り出す事も多くあったり、
他者のものをいじりトラブル

対応に困る、内服に頼ってしまう、利用者の理解ができていない。
S氏のペースではなく、職員主体のケアに・・・

＜　ひもときシート活用　＞

過去⇒娘と散歩したり、家族や友人と旅行に行ったり働き者だった

①自分の好きなように動きたい、居場所がない

過去⇒元々きれい好きで神経質だった。いつも掃除をしていた

②周囲が気になる。整理整頓、掃除がしたい

過去⇒TVや読書、コンサート参加、旅行など多趣味だった

③自分自身が何をしていいかわからず、不安を感じる

＜　取り組み内容　＞

①散歩が好きだったという背景から本人が歩き出した時には
さりげなく寄り添い見守る

②リハスタッフとの歩行機会の増加で下肢筋力アップを
はかり、見守りの元、自由に歩行できる機会を増加

③旅行が好きだった、多趣味だったという背景から、
コミュニケーションの機会を多く持ち、家族に協力のもと
懐かしい写真の提供

本人の育った環境や性格がわかる
本人の行動の意味がわかる

利用者理解が深まる

職員の意識が変化し声掛けやコミュニケーション方法に変化

～利用者主体のケアに～

下肢筋力が向上し、食堂内は遠目見守りに、徘徊や怒ったりする事も減り、落ち着いて過ごせる時間が増えました。
そして笑顔で過ごせる時間も多くなりました。

＜　まとめ　＞

①疾病
②心身状態
③生活歴
④性格
⑤取り巻く環境

本人に合うケアの提供を行う事の大切さを改めて学びました。

～パーソンセンタードケア～

「認知症」の人ではなく　認知症の「人」

～　ご清聴ありがとうございました　～